

Title	国富論書誌 アダム・スミス書誌続篇
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.9 (1942. 9) ,p.745(23)- 790(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19420901-0023
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420901-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ることは出来ないのである。しかし乍ら、斯かる場合が實際に起つたとしても、世界經濟の基本的方嚮を離れた貨幣制度を樹立することは出来ないし、又強ひて之を採用したとしても、長く存立せしめることは出来ないのである。それ故に、假りに金の利用されることがあるとしても、それは決して從來の意味に於ける金本位制度では絶対にあり得ないと推論せざるを得ないのである。

右の如く、今日見透し得る世界經濟新秩序に於いては、金本位制度が復活することはないといふ斷定を下さざるを得ないのであるが、しかしこの事と、金を國際的決済の用に供することとは自ら別個の問題であつて、それは新秩序に於ける國際支拂體制の見地から吟味されねばならぬところである。

(附記) 金の地位に關して検討さるべき問題が幾多あることは冒頭に指摘した通りであるが、茲で續いて論及する邊を缺くに至つたので、他の機會に譲りたいと思ふ。

國富論書誌

—アダム・スミス書誌續篇—

三邊清一郎

世に、アダム・スミスの『國富論』ほど、生れ出づるに長い歲月を閲した書物も尠からう。それは執筆に十二年、更に構想に十二年を要した。彼と後によく似たジョヨオジ・ホーンが、かつて「最も生命の長い書物は最も永く母の胎内に留まつた書である」と言つたことがある(J. Rae: Adam's Smith, p. 284)。スミスの『國富論』は正にかゝるものであつた。これに就いては舊稿「アダム・スミス書誌」(本誌第三十四卷第九號參照)に引用した『道徳情操論』の一節を想起して戴きたい。彼はその初版(一七五九年)の終りで「別の論稿に於いて、正義に關する事項のみならず、警察、收入、並に軍備、及び法律の對象たるべき爾餘一切のものに關する事項に於いて、法律及び政治の一般原則とその社會の種々な時代、時期に於いて關した様々の變革を記述しやうと試みることを約束し(W. B. E. C. I. C. I. 一七九〇年に諸國民の富の本質と原因とに關する研究に於いて「一部分、少くもその警察、收入及び軍備に關する限りこれを履行した」と言ひ得たのである(Moral sentiment)。是に『國富論』は半生を超える研究と思索の所産、十年隱棲の勞作の結果」(Wealth of Nations, ed. 5. ed. p. vi.)

by E. G. Wakefield. London, 1843. Preface) 本書は彼れがバックスルウ公爵に伴つて佛蘭西に渡つた當初、「殆んど爲すことのない」無聊を慰める爲めにトゥルウスで書き初めたものとせられる。公爵は佛蘭西人に全く識り合がない。私には相識になつた少数の人との交際を進めることが出来ない。彼等を吾々の宅に伴ふことが出来ず、又私は必ずしも常に自由に彼等を訪問することが出来ないから、私がグラスゴウで送つた生活は、今此處で送るものに較ぶれば、愉快な陽気な生活であつた。私は時を鎖す爲めに一冊の本を書き始めた。(ヒューム宛一七六四年七月五日附スミス書簡。アドオ^{八九})この本が國富論であるといふのである。しかしこの時期に、或ひはもつと廻り得るのかも知れない。蓋し同じ年の十一月にトゥルウスにある彼れに宛て、グラスゴウから「日々を愉快に過ごされて、閑暇な折には當地(グラスゴウ)で大層捗つて居た書物の筆をなほ進めて戴きたい。心ゆくまで完全にするために、御自分で必要と考へられるよりも長くその本を手にし得ないのは、残念といふものです」と書き送つて居る人があるからである(ジョン・グラスフォード。W. R. Scott)。スミスには斯ういつた永い著作計畫があつたのだから、この書物が國富論草稿であつたと考へても不思議はあるまい。

(註) この頃彼が國富論を書き初めて居たといふ傍證の一として、エルツェンシュウスの食卓で彼れがアッペ・モレレと識り主に經濟問題、商業銀行、公債の理論その他スミスが當時練想しつゝあつた大著に於ける様々な點を論じたことが擧げられるかも知れない。(小泉博士、前掲書九五頁。J. Rae: Adam Smith. p. 201.)

然るに最近直接國富論執筆のために書かれたとは推定されて居るなきが(G. W. R. Scott: Adam)しかしこれまでに發表された諸資料に於けるやうに法學論の一部としてではなく、單獨の經濟論の初めの部分を構成し、且つそれ等に較べて最も完成した形すなはち國富論のそれに近い理論を展開して居る一草稿が発見された。それはグラス

ウ大学のW. R. スコットが前記バックスルウ公爵の母ダルクイリス伯爵夫人の家に傳はるタウンゼンド文書中に發見し、「國富論の一部の初期草稿」The manuscript of an early draft of part of the Wealth of Nations と名付けて發表して居るものが即ちこれである(The manuscript of an early draft of part of the Wealth of Nations)。チャールズ・タウンゼンド Charles Townsend は、何人も知る通り、ダルクイリス伯爵夫人の後夫、従つて公爵の繼父に當り、その教育に就いて考慮し、スミスをその家庭教師に選んだのも彼れであつた。彼れの文書はその死(一七六七年、その時には大藏尙書であつた)後ダウニング街及びそのタウン・ハウスからアッダナベリの本邸に移され、夫人の死後再びダルクイリス・ハウスに移して今日に至つたものである(W. R. Scott: Adam Smith-as a student and professor. p. 317.)

この草稿には特獨の特徴がある。すなはち最初の章は第二章と名付けられ、國富論の第一及び第二章に相當する分業を取扱つて居る。その材料は若干部分を除き、多少表現を變へて、殆んど逐語的に後者に移されて居る。唯々本草稿が國富論で繰返される時、舊著が新著に取り入れられる際に屢々見るやう擴張されるよりも、寧ろ壓縮されて居るのは意外とせられるだらう、殘餘の章は稍々詳しい概要といつたものである。かくて「グラスゴウ講義」よりも粗ではあるけれども、その議論が綿密完全であるのは興味あることである。第三章は價格を、第四章は貨幣を、そして第五章は飛んで「富裕の遅き進歩」を取扱つて居る。

スコットはこの草稿をグラスゴウ講義の早い頃の訂正と見て居る。「講義」には用意なく挿入されたとはいへななくて、しかも草稿には見られ得ない性質の少數記述がある。また草稿作成の際に諸章の概要を口授することが必要でもあつたらう。その際「講義」から草稿を區別する他の相違の或るものを導入したとしても、それは無理からぬことである。より、以上の研究と彼れの教授資料の利用がノート作成者が梗概を作つた講義にない思想を彼れに與へると

ふことも有り得ないことである (Ibid. p.)。また彼れの説明に據れば、草稿は當時の大學の寫字生の筆蹟で一つ折にした丈夫な手漉の紙に書いてあり、スミスがこれを校正して各枚——それは四頁になつて居る譯だが——に「A. B. C. D. E. F. G. H. I. J. K. L. M. N. O. P. Q. R. S. T. U. V. W. X. Y. Z.」まで番號を附し、結局四十八頁を數へ、一一、九五一語を含んで居るといふことである。この草稿は完結して居ない。各頁には見出語が附いてゐる。最後の第四十八頁は、「グラスゴウ講義」の「富裕の遅き進歩」の農業を取扱ふ部分の終りの方——國富論第三篇第一章に當る——に出て来る「老カートー」からの引用句で終つて居る (p. 229)。これは國富論では第一篇第九章第一部に譯出されて居るものである (Cannan's ed.)。これが「Ibid.」であつて、この頁の見出語は「The Old Man of the Mountain」であり、失はれた頁の最初が手工業及び商業の遅き進歩を取扱ふものであることを示して居る (Scott, Adam, p. 318)。

本草稿發見の價值としては次の諸點が認められるだらう。先づ經濟理論が法學から完全に分離して取扱はれて居ることに注意を向けられていふ。これは劃期的な處置である。「グラスゴウ講義」では半ば以上が法學論に捧げられ、殘餘が「警察論」と名付けられて、これが經濟學の講義を形成して居たのである。然るに今や新しい出發點が採られた。本草稿の最初の章は、前述のやうに「第二章公共の富裕の性質と原因」である。そこでは國富論の第一、第二章に相當する分業が取扱はれ、明かに經濟學理論のみを對象とし、他を取扱はない意圖が示されて居る。彼がこの時國富論の緒論に相當する總序を豫想したことは明かである。假りにこの草稿にない第一章が書かれたとしたら、「グラスゴウ講義」の警察篇第一、第二節すなはち「人類の自然的欲望」及び「これに役立つ技術」が繰返へされたであらうことは疑ひない。そしてそこへ現在の第二章すなはち講義の第三十六節「富裕は分業より起る」以下が続くといふ順序で (W. R. Scott, An early draft of part of the Wealth of Nations, in "Economic Journal", Sept. 1935, p. 429)。

第二に、本稿では分配問題が極めて明白な形で提示されて居る。彼は冒頭に近く、一方に労働者と農夫が居り、他方には地代によつて虚榮を満しつゝある地主、利子によつて有ゆる不名譽な慾望に耽ける資本家、最後に懶惰輕薄なる廷臣の居る風景を描き (Scott, Adam, p. 326) 又また十萬家族を包容する「大社會」を想定して、社會の労働生産物が各階級の人々の間に分配される國民的分配を説明した。

「十萬家族の社會では、恐らく百家族は少しも労働しないで、しかも暴力若しくは法律のより、温健な壓迫により、他の孰れの一方よりも社會の労働のより、大なる部分を使用するだらう。この莫大な取除けを行つた後の殘餘の分配も亦、決して各個人の労働に比例して行はれない。反對に最も多く労働するものは最も少くしか取得しない。その暇の大部分を贅澤と享樂に費す富裕な商人は、その業務を行ふどの書記、會計係よりも遙かに大きい割合の彼れの商賣の利潤を享受する。してこの最後のものも亦多くの閑暇を享樂し、付添つて居るといふ拘束以外殆んど苦痛を嘗めることなくして、彼れ等の指揮に従つて遙かに劇しく熱心に労働する同數の職人の三倍よりも遙かにより、大なる生産物の分前を享ける。然るに職人も亦、遮蔽せられ、天候の災厄から護られ、氣樂にまた幾多の機械の便宜に助けられて働きながら、土地と天候と闘ひ、社會の有ゆる他の人員の奢侈品の材料を供給し、言はず人類社會の全構造をその双肩に荷ひながら、自分自身は重壓により地上に壓付けられ、建造物最下部の基礎中に埋もれて見えなくなつて居るやうに思はれる哀れな労働者よりも、遙かにより、大なる分前を享受して居るのである。」 (Ibid. p. 327-28)

吾々はこゝで賃銀及び利潤の分配の極めて魅力的な説明に接するのであるが、更に他の箇所で一再ならず地代に觸れて居ることを知るのである。穀物に對する奨励金に就いて。それは穀物の價格を低下した、またそれによつて穀物農圃の地代を低下する傾向あること。その數の減少により、それは牧草畑の地代を引上げ、屠肉の價格、乾草

の價格、馬の飼養費、従つて馬車の價格を騰貴する傾があり、それだけ國內商業全體を阻害すること。(Ibid. p. 346.)
 なほこの外生産的、不生産的勞働の區別の明確に立てられて居ること、及び分配觀念が生産論中に論ぜられて居ることが注意されていゝ。これ等はキャナンが、グラスゴウ講義に「痕跡だにない」、それは彼れがフキジオクラアトからその必要を學び、既存の價格理論に結び付けたものだ」と結論するところのものである。

こゝに於いてアダム・スミスの想源に關し、この草稿の作られた時期が問題になつて来る。これに就いては本草稿の發見者スコットはこのやうに言つて居る。先づ本草稿はタウンゼンド文書中から現はれたのだから、その存命中にスミスから彼れに手渡されたと見るのが至當である。然るにタウンゼンドは一七六七年九月四日に死んで居るのであるから、執筆の時期は一七六二—三年のグラスゴウ講義からこの時にまで限られる。佛蘭西から歸つてからの六ヶ月は倫敦に在つてタウンゼンドのために、又はこれと協力して財政上の研究に従つて居たのだから、かういふ事情の下ではこの草稿を準備する必要はなかつたらう。(W. R. Scott: Adam Smith, at Downing Street 1766-7. In) 次に滯佛時代の三年間であるが、手蹟がグラスゴウ大學寫字生のそれであり、またその用紙の種類を稽へてこの期間に書かれたものとは思はれない。筆記講義以後滯佛前、一七六三年の恐らく夏若しくはその後であらうといふことなる(W. R. Scott: New light on Adam Smith. In "The economic Journal," vol. 46, 1936, p. 408. W. R. Scott: Adam Smith. p. 319, 321. Cf. W. R. Scott: The manuscript of an early draft of part of the Wealth of nations. In "Economic Journal," vol. 45, 1935, p. 435.) としてこの推論の結論は「スミスの分配論を渡佛以前に遡らしめることとなる。スコットの意圖はスミスが分配論の必要をフキジオクラアトに學んだといふキャナンの結論に反對したのであらう。彼れは猶ほ、講義筆記に分配論が殆んど認め得ない程度に壓縮されて居ること(819 p.)、更に遡つてユダレン俱樂部での講義(一七七五年)に價格の地代利潤及び賃銀への分割を論じたことを指摘して居る(Ibid. p. 320. 本誌第三十四卷第九號小稿「アダム・スミス書誌」一二二—

八一三〇)。本草稿の全文はスコットの『學生及び教授としてのアダム・スミス』William Robert Scott: Adam Smith as student and professor. Glasgow, 1937. に收められた(なほこの點に關しては、大道安次郎『スミス經濟』昭和十五年一一二—一三三頁參照)。

二

スミスが滯佛時代の初めヒュームに當て、國富論を書き始めたことを知らせたことは、前に述べた通りである。しかしそれが上梓されるまでには、佛蘭西から歸つてからもなほ十年の歳月が流れた。彼は一七六六年十一月初旬歸英して暫時倫敦に滞在した。その間彼れは道徳情操論第三版を出し、新たに建設された大英博物館で國富論への資料を蒐め、セルバリン卿のために植民地行政の調査を行ひ、またタウンゼンドの財政研究を扶けた。そして確かでないが多分翌年五月郷里カコウデイに歸つた。このカコウデイの生活を小泉博士は、「彼れは喧噪なる大都を離れ、少年時代の憶出に富む故郷の町に、幾年振りかで老母と朝夕を共にすることになつた。幸ひにして今日閑がある。裕かな収入がある、豊富なる藏書がある。彼れはこの有利な境遇に身を置いて國富論の著述に没頭した」と描寫して居られる(前掲書一〇五頁)。彼れは同年六月七日ヒュームに次のやうに書いた、「僕の此處での仕事は研究である。過去一ヶ月僕は其れに没頭して居る。僕の樂みは海岸に沿ふて長く獨りで散歩することである。僕がどんな風に自分の時を過ごしてゐるか君に分るだらう。併し僕は極めて幸福で、快適で、且つ満足してゐる。僕は生涯にまだこれ程そんなだつたことはない」と(同書一〇五頁)。

國富論は口授されたといふ説がある。その文章が道徳情操論のそれに比べて冗漫だといふのがその一である(ラマック J. Rae: Adam)。國富論が口授されたか何うかは明かでないが、彼れに寫字生を用ひる習慣のあつたことは事實である。それは彼れの著述の際に於ける遲筆の故でもあつたらう。彼れは死ぬ少し前ステュアートに、いろ／＼字を書くことを練習したが、文章を書くのが初めと同じく遅くてひどく不便だ、と話したといふことである。後者は

彼れが著述を爲す場合、普通室の中をあちこち歩き乍ら秘書に書き取らせたと書いて居る (Essays, p. lxxxvi)。殊に執筆の困難は晩年に至つて加へたらしく、一七九〇年に彼れはダグラスに宛て、手の震へがひどくなつて筆を執ることが益々不便になつたと知らせて居る (W. R. Scott: Adam's, Smith, p. 310)。

カコウデイに退いて二年、囑稿大いに進み、殆んど初稿を完成する程度にも達したのであらうか、一七七〇年二月六日のヒュームからの手紙には、彼れに倫敦に上る企てのあつたこと、及び「理性と感覺と學殖に満ちた一書を出版する考へ」を懐いたことが記されて居る (J. Rae: Adam Smith, p. 251; David Hume, the Letters of ed. by J. Y. T. Greig, vol. ii, p. 214)。しかし彼れはこの時には倫敦へ行かなかつた。また彼れの書も猶ほ六年間出版の運びに至らなかつたのである。彼れはこの間恒に絶えず原稿の訂正、書入れを行つて居た。これは國富論の諸處を播けは明かである。例へば、地代の章に於ける牛皮の價格の記述は一七七三年二月に書かれたものであり (1st ed. vol. i, p. 291; Cannan's ed. vol. i, p. 231)。植民の章に於ける佛蘭西から奪取した植民地の精糖作業の衰退は十月に (1st ed. vol. ii, p. 179; Cannan's ed. vol. ii, p. 83)。賃銀の章に於けるアメリカの賃銀に關する條はこの年の或る時期に書かれたものであり (1st ed. vol. i, p. 85; 2nd ed. vol. i, p. 71)。植民の章に於ける、對北米貿易に關する最近の諸事件に就しての記述 (1st ed. vol. ii, p. 211; Cannan's ed. vol. ii, p. 107)。公債の章に於ける愛蘭の收入に關する記述 (1st ed. vol. ii, p. 423; Cannan's ed. vol. ii, p. 256-57)。ながら彼れに對する東印度會社招聘事件が災ひして、國富論草稿が一七七二年から七四年に至る「四年間著者の机上に訂正せられず、變更せられずして横はつた」といふロシヤの推測は當つて居る (Ibid. p. 256-57)。

この大著述に費された勞作は、郷里の生活を樂しむ自らの満足した言葉にも拘らず、漸く彼の健康を害ひ始めた。それは一七七二年一月二十八日にヒュームが彼れに宛て、書いた手紙に始めて觸れられて居る (David Hume, the Letters of, vol. ii, p. 256; J. Rae: Adam's, Smith, p. 252-53)。而して彼れ自身は同年九月五日に、バルトネに「私の著書はこの冬の初めまでに脱稿して居た筈であるが、一には娯樂の缺乏と一は事務を考へ過ぎることから生ずる不健康のため起る妨害は、その出版を更に數月遅らすことを已むなからしめるであらう」と書き (J. Rae: Adam's, Smith, p. 254)。彼れの滄らぬ友ヒュームは十一月にエデキンプロから休養のためクリスマス前の數週間をその地で送り、それから「カコウデイに歸り、秋(一七七三年の)前に著作を了へて倫敦に出」印刷に附するやう懇願した (David Hume, the Letters of, vol. ii, p. 266; J. Rae: Adam's, Smith, p. 258)。

ヒュームがこの手紙を書いた翌春、彼れは國富論の原稿を携へて倫敦に出た。これはその頃彼れに「ミルトン公爵の家庭教師として大陸に再遊の機會を興へる中出があり、これに就いて相談するために上京したものであつたが、その儘この地に留まり、國富論の執筆を續けた。」 (W. R. Scott: Adam Smith, p. 283) 彼れが死後を稽へて遺稿の處置をヒュームに托したのは、この時すなはち倫敦に出る前のことである (前掲「ヒューム」參照)。この頃國富論の原稿は殆んど完成の域に近づいて居た。前述のやうに、彼れはバルトネにその上梓近きにあることを報じ、ヒュームまたこれを期待し、アダム・フアグスンに至つては、この年に出た「市民社會史 History of civil society 第四版に」世間は(道徳情操論の著者なるスミス氏によつて)間もなく、これまで凡ての科學者の有ゆる問題に關して現はれたものに匹敵する國民經濟の理論を供給されるであらう」と書いたほどであつたが、出版までには猶ほ三年を俟たねばならなかつた。恐らく倫敦に出るから行つた調査に豫期以上に重要なものがあつたのだらう。ヒュームは後に國富論が出た時に「この書は恐らく君の最近の倫敦滞在によつて大いに改善されたらう」と言つて居る (小泉博士、前掲、書一〇六一七頁)。彼れの所謂「現下の動亂」すなはちアメリカの獨立戰爭もその一であつたに相違ない。かくて彼れはヒュームから「一七七六年二月八日の手紙で」若しアメリカの運命の決するのを待つのならば、隨分待つがいと」と擲諭されたが、印刷は既

にこの年の始めに成つて居たらしく、「貴君の本は既に久し前に印刷されて居るが、まだ廣告される運びになつて居ない。どうした譯か」と訊ねられて居る (David Hume, the letters of, vol. II, p. 398. Cf. Ibid. p. 314. Rae: p. 280-81)。彼れ自身は本書第三版序文で、「本書初版は一七七五年末より一七七六年初めにかけて印刷された」と言つて居る。

三

かくしてそれより一ヶ月の後すなはち一七七六年三月九日、遂に「前格拉斯ゴウ大學道德哲學教授、王立協會會員、法學博士アダム・スミス」の『國富論』(An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. By Adam Smith, LL. D. and F. R. S. Formerly professor of moral philosophy in the University of Glasgow. London, 1776. が公にされた。四折版二卷(五一〇頁及び五八七頁)、價格はボール表紙で一磅十六志。出版者はW・ストラアン及びT・カデルである。ウキリアム・ストラアン William Strahan (1715-1785) は、道德情操論を出したA・ミラアの協同者で、「倫敦クロニクル」紙を發刊し、また後に王室印刷者となつた。彼れはヒューム、スミス、ジョンソン、ギボン等のよき相談相手となり、またベンジャミン・フランクリンとも交際があつた。ギボンのローマ興亡史が到る處で出版を拒絶され、カデル及び著者が第一刷は五百部で充分だらうと考へた時に、「その數がストラアンの豫見的洞察力によつて倍にせられた」といふ挿話が残つて居る (National biography, vol. xix, p. 17. Cf. D. Hume, magazine and historical chronicle, vol. 1. p. 221. note; Cf. The gentleman's LV. 1785. Pt. 2. 574, 639. またトマス・カデル Thomas Cadell (1742-1802) も「前稿」述べたやうにA・ミラアの協同者で一七六五年以後全然その業務を譲受けた。國富論は第七版まで彼れの手で出て居る。發行部數は明瞭でない。出版條件に就いては、一七九二年スミス遺稿出版の際カデルがH・マッケンジイに送つた手紙に次のやうに書かれて居る。「スミス氏と吾々の契約を顧みるに、吾々が著者と四折版の利益を分配し、本が出た時に、吾々

はその権利に對つて十四年の期間に對し三百磅を拂ひ、また著者が承らへて第二の十四年間に譲渡した場合に更に三百磅を支拂つたことが知られる。」(W. R. Scott: Adam) この文言はスミスが一七七六年十一月十三日にストラアンに書いた「私の書物の初版の稿料三百磅を受取つた」といふ言葉と一致する。(J. Rae: Adam) (註)
 (註) レエが一七七六年十一月十三日の手紙に三百磅を受取り、餘は殘額があるやうに言つて居るから、稿料の金額は五百磅であつたのではないかと言つて居るのは、この手紙を読み違へて居るのである。(Ibid. p. 285)

書物の賣行は、出版者の豫想を嬉しくも裏切つて、恐らく一千部刷られたであらう第一版は半歳餘で賣盡されたと傳へられる。ストラアンは、出版後一月しか経たない四月十二日に、彼れの著書は多くの思想を必要とするから、ギボンの著作ほど普及し得ないと言つたヒュームの言葉を取上げて、「貴君がギボン氏とスミス博士の著書に就いて言はれることは洵に正しい。前著は最も人氣のある著作である。しかし後者の賣行も、殆んどそんなに速くはないけれども、何等かの目的で熟讀するために多くの思想と省察——それは現代の讀者達の間に豊富に存在せぬ資質だが——を必要とする著述から期待し得るよりも、良好である」と述べて居る。(J. Rae: Adam Smith)。

この國富論初版に一の異版と、一の疑問ある版本がある。前者は最近ミューアヘッドの賣立に現はれた、第二卷だけでなく、第一、第二兩卷共に副標題を有するものである。こゝで少しくストラアン、カデルによる倫敦初版の體裁を詳しく説明すれば、第一卷には標題紙がある丈けで副標題紙がない、そして標題紙裏に道德情操論第四版の廣告が載つて居る。第二卷は標題紙及び副標題紙共に具はり、前者の裏に次の二つの誤植は意味に關係があるからペンで訂正されたいとの意味の言葉が記されて居る。ミューアヘッド本ではこの標題紙及び副標題紙が削除されて、その代りに別の標題紙と副標題紙とを連結した二枚が兩卷共に挿入されて居る。そしてその出版者の中にスト

ライオン、カデルの外にW・クリーチの名が加へられて居る。すなはちその標題紙の出版事項は次の通りである。
 London / Printed for W. Strahan, and T. Cadell, in Strand; / and W. Creech at Edinburgh. IMCCLXXVI.
 ウェリアム・クリーチはブレニア、カレン、ロバート・バインズ等の著作の出版のあるエデキンプロの出版書肆である。それは蘇蘭市場を目的とした特殊版——假りにエデキンプロ版と言つて置かう——の一冊である。この版はその出版事項の記載から見て、後に述べる同年タブリンで出版された不正版とは異つて、正當な許可版と考へてよむのであらうと思ふ。この版は極めて部数が少く、前記賣立に出たのが初めてであるといふ(The times literary 20, 1940)。後者は國富論に「一七七七年の標題紙年號のある初版がある」といふ話である。それはW・I・ラウンスWilliam Thomas Lowndes がその『書誌學提要』The bibliographer's manual of English literature ロンドン本 Roxburghe copy には「一七七七年の刊行年がある」と言ひ、アリバーン Samuel Austin Alibone がその『批評的英文學辭典』A critical dictionary of English literature and British and American authors. の初版の刊行を「一七七六年(或るものは「一七七七年」)と記して居るものである。しかし本書に就いてはこれ以外知られるところがないやうである。D・マッシュイは前記エデキンプロ版と混同して居るものであらうと推測して居る(Ibid. p. 356. W・I・Winslow L. Webber: Books about books, Post 1937. p. 89-90)。
 Dictionary of national biography, vol. xii p. 212. 參照
 マッシュイは「彼の出版者および顧客であつた」と稱せられた(W. R. Scott: A manuscript criticism of the Feb. 1938)。それは勿論獻本に用ひられたのである。そしてその際第一に彼の意中に在つたものは「ヒュームであつたらうと思はれるが、しかし彼の出版を最も喜んだのも彼れであつた。(註二)後者は四月一日に次のやうに書して居る。「よくやつた、スマイス君。大いに君の出來榮を喜ぶ。精讀して大きな心配がなくなつた。君自身からも、

君の友人及び公衆からも非常に期待された本であつたから、私はその公刊の爲めにふるへたのであるが、今は安心した。その閱讀には必然に多く注意を必要とし、しかも大衆はこれを餘り與へないであらうから、初めなほしばらく人氣の出ることを疑ふだけである。しかしそれは深さと堅牢と鋭さをもつて居る。また多くの珍しい事實で例證されて居るから、終ひには公衆の注意を惹くに相違なし。(David Hume, the letters of, vol. ii, p. 311; J. Rae: Adam Smith, p. 286.)
 ブレニアも彼れと共に自著を贈られた一人である。彼れも「一讀の後、貴君は商人等が商業全體の問題と混同するか、商人の偏つた曲論を覆し、世のために多大の貢獻を爲した。貴君の著述は、ある程度國民の商業法典となるべきである、否なるであらうと信する」と激賞した(W. R. Scott: A manuscript criticism of "The wealth of nations")。(註二)

(註一) ロヂャースは「一八一九年」の贈譯本をインペーチの文庫で見たと言つて居る(W. R. Scott: A manuscript criticism of "The wealth of nations", ed by J. E. F. Rogers, 2d. 1880. Editor's preface, p. xviii)。しかしこの文庫はインペーチの死後「一八七二年に賣りに出された(J. Bonar: Catalogue, p. 174; J. Rae: Adam Smith, p. 285)。

(註二) 同じく四月二日にギボンが「アダム・ファグソンに宛てて」吾々の共同の友アダム・スマイス氏は極めて優れた著作で公衆を富ました。廣汎な一科學が僅かに「一部の書を以つて、また最も深遠な思想が最も明瞭な言葉で表現されて居る」と書いた。(J. Rae: Adam Smith, p. 287)

しかしこの大著の閱讀には、ヒュームが言つたやうに、「多くの注意を必要としたに相違ない。國富論も第三版を重ねた一七八五年に、フォックスは友人に「總べてこれ等の題目には私の理解を超えるものがある。私自身それを包容できなかつたし、また出來た人を見出せない程廣いものがある」と告白したと傳へられる(T. Rae: Adam Smith, p. 289)。
 そういふ風であつたから直ちに一般から批評を聞くことが出來なかつた。例へば、ゼントルマンズ・マガズキンには遂に本書に就いて一行も書いてない。ハチソンの著書に對する批評が當時の他のそれと同じく多く手紙で書かれ、また少數のものは談話の間に爲され、今日ではこれを盡す由もないと言つて居るスコットの言葉は、この場合にも想

起されていゝものかも知れなす(W. R. Scott: Francis)。ヒームは七六年の四月半ば倫敦に出で貴君の本がこの街に汎濫して、一般から歡迎されてゐるのを見た。特定の部分々々は議論の餘地があると考へてゐるひとが多いが、これは固より貴君の期せられるところだ」と巷間の消息を傳へてゐる(J. Rae: Adam)。マニエアル・レヂスターには二頁の紹介が載つて居る。――

「佛蘭西經濟學者の功業に就いては疑ひはない。彼れ等は本世紀に於いて農業、製造業及び商業の問題に關し、合理的理論への道を拓いた。しかし彼れ等の間からは一の著述も現はれて居ない、また恐らくその全體から心的な賢明な洞察力、見解の廣さ、諸部分の明確な區別、正當にして自然な結合依存に對し、本書に比すべき何物をも求めることは出来ない。それは最も單純な肉體的勞働の第一端緒に初まり、容易い自然な段階を経て精神的最高能力に到る、完全な社會分析である。その過程に於いて、技術、商業のみならず、財政、正義、政策、軍隊の經濟及び教育組織が、數々深く、常に巧みに明瞭に、考慮され論ぜられて居る。思想は豊富で新し。その眞實性、堅實さに就いて何等の判断が下されるまでには、時日が必要であらう。(Annual register, or a view of the history, politics, and literature for the year 1776. London, 1777. Character, p. 241-43.)

しかしこの批評もその體裁から見て、先に同誌に道徳情操論の書評を書いた彼れの親友の一人エドモンド・バークの筆に成るものと思はれる。バークは前の機會にも述べたやうに、スミスの歎美者であつた。そしてスミスも亦彼れを尊敬し、後に「バークは豫め打ち合せをせずして而かも經濟問題に就いて余と正しく同じ考へを抱く余の知る限り唯一の人だ」と言つたのである(小泉博士、前掲書二〇二頁)。唯々こゝに同年九月(二十五日の日附がある)に書かれたT・ポオナルの批評がある。『ポオナル總督より法學博士、王立協會會員アダム・スミスへの書簡。その「諸國民の富の本質と諸原因に關する研究」に述べられた所説の數點への檢討。』A letter from Governor Pownall to Adam Smith, L. D. F. R. S. being an examination of several points of doctrine laid down in his "Inquiry into the nature and

causes of the wealth of nations. Lond. 1776 がこれである。この公開狀は、「著者及びその人が學界に於いて執る態度に就いて……何等個人的知識をもたなかつた」筆者の批評として注意すべきである。トマス・ポオナル Thomas Pownall は會つたサッチャメント・ニューシヤシーの總督を歴任し、Principles of polity, 1752; Administration of the colonies, 1764; Middle states of America 1776 その他の著述のある政治家である。彼れはスミスの國富論を「科學の最も重要なもの、人類社會の知識に於ける若干の第一原理を確定するもの、政治的作用の知識に對してプリンシピアとなる」ものと賞揚したが(p. 3)、幾多の點に於いてスミスと見解を異にし、殊に植民地貿易獨占の否認は彼の承服し難うところであつた(J. Rae: Adam)。著者はスミスにこの小冊子を贈り、スミスはまたこれに對して一七七七年一月國富論再版準備のため倫敦に出た折に、著者に對して丁重な謝意と、數日中に參上し、互ひに一致する點、相違する點二つ乍らを親しく論じた。希望を申送つた。(Ibid.) この手紙をゼントルマンズ・マガズインに初めて發表した紹介者は、「彼はその再版で異論のあつた部分のあるものを變更し、回答の代りにそのやうに變更された、この再版の印刷された一本をポオナル總督に贈つたので、論争はすつかり息がついた」と言つて居るけれども(The gentleman's magazine: and historical chronicle for the year MDCCXCV. vol. 65. Pt. 2. 1795. p. 634.) この會見はスミスの見解を翻すに足らなかつたものと見える。一七八〇年十月に和蘭のアンドレアス・ホルトに手紙を書いて、「私はどの私の反對論者にも直接回答するに當らなうと思ふ。第二版で私はポオナル總督の異論は總べて除き得たものと信する」と言つて居る(W. R. Scott: p. 282.)。事實吾々が國富論第二版とポオナル總督の冊子とを較べるならば、「その差異は總てスミスの見解が熟して居り、總督のそれが未熟である點に存する」ことが知られるのである(J. Rae: Adam)。一七七八年匿名の著者M. Tによる「國防に關しエバキンプロなる一進貴族よりバンクフルウ公爵に捧ぐる書」A letter from a gentleman in

Edinburgh to his grace the Duke of Buccleugh on national defence, with some remarks on Dr. Smith's chapter on that subject in his book, entitled "An enquiry into the nature and causes of the wealth of nations" Lond. 1778 中に於ける彼れの國防費に關する見解に對しては、彼れはその本を書く時、私の著書を仕舞まで讀まなかつたのだ」と應へた(W. R. Scott: Adamn. Smith. p. 282.)

彼れが尊敬を拂つて耳を傾けたのは、ジェームズ・アングアスンの批評である。彼れは後者を「アングアスンなる名の極めて精勵、勤勉且つ正直な人」と書いて居る。アングアスンは一七七七年その『國民の勤勉心を刺戟する方法に關する觀察』Observations on the means of exciting a spirit of national industry. 1777 2長5一章を書き、スミスの穀物輸出獎勵金に關する意見に強く反對した(Postscript to letter. xii. p. 307.)。しかしこの場合にもスミスは、初版第二卷一〇一頁で偶々「事物の性質は穀物に、如何なる人爲的の制度も變更することの出來ない眞價值を固く刻み附けた」と書いたが、この表現は確かに強過ぎる。「事物の性質は穀物に、只その貨幣價格を變更することによつては變更し得ない眞價值を固く刻み附けた」と言ふべきであつた。「これが議論を必要とする全部であり、また私の眞に意味するところもそれだけであつた。…私は再版でこの不注意な表現を訂正した。そして私はこれによつてアングアスンの議論全體の根據を撤去したものと解するのである」と考へた(W. R. Scott: Adam Smith. p. 282-83; Wealth of nations. Cf. J. Anderson: Observations, p. 354-2. ed. p. 102.)

また本書初版への批評ではないが、彼れがその眼で見、その耳で聽いたものとして、割くに描くのは、ベンサムのものである。ベンサムは國富論第三版の第二編第四章「利附資本に就して」を讀んで、當時現行の利息制限法を是認するスミスを難じて『高利權護論』Jeremy Bentham: Defence of usuary, showing the impolicy of the present

legal restraints on the terms of pecuniary bargains in letters to a friend. To which is added, a letter to Adam Smith, Esq. LL.D. on the discouragements opposed by the above restraints to the progress of inventive industry. 1787. を書いた。スミスが浪費者、起業家といつた連中は高利をおそれないから、資金がこの輩の手に渡るのを防ぐため、法定利率は普通市場利率を繰か上廻る點に制限すべきだと言ふの(E. Cannan. vol. 1. p. 338-39.)。ベンサムは、浪費者は論外だが、同じ起業家といふにも深慮を缺く虚業家もあれば着實な企業家もある。高利の制限はこの二者を差別なく抑へる。利息制限の廢棄はあらゆる種類の起業——そのうちに不眞面な虚業を含むこと勿論だが——を盛んにして人類の繁榮と進歩を將來する、と主張したのである(The works of Jeremy Bentham, published under the superintendance of his executor, John Bowring. vol. III. Edinburgh. 1843. p. 22-23.)。スミスはこの批評を友人の甥なるひと(ウリアム・アダム)から聞いて「是認したやうに見える」と言ふ(John Rae: Adamn. Smith. p. 424.)。けれどもこの書の公にされたのは、國富論第五版の出版後、スミスの晩年に近い頃であつたから、その影響は國富論には現はれてゐない。

私はここで彼れの學說なり學史上の地位を深く論ずる考へはない。けれども一七五九年彼れが『道德情操論』初版の最後の部分でなした公約と、九〇年の第六版序文を讀んだ吾々としては(本誌第三十四卷第九號、小稿)、本書第四篇第九章の最後の文章を看過することは出來ない。或は特惠し、或は制限する一切の制度が、かくして完全に撤去されるならば、簡明な自然的自由の制度がおのづから確立される。この制度の下に在つては、各人は、正義の法を侵害しない限り、思ふ儘に自己の利益を追求し、自分の勞働と資本とを以つて他の何人、または何の人々の階級の勞働及び資本と競争するも、完全に自由に放任される。(E. Cannan's ed. vol. II. p. 184.) すなはち思ふが儘なる自己利益の追求を許す彼れの自然的自由の制度は、恣意の奔放を容るす無軌道の自由の制度ではなくて、各人が「正義の法を侵害しな

居る (Wealth of nations, ed by E. Cannan.)
(Editor's introduction. p. xiv.)

第三版が出るまでには少しく間があつた。彼れ自身は「私は『諸國民の富に關する研究』の著者であることを殆んど忘れて居た」と、一七八〇年(十月二十六日)に言つてゐる (J. Rae: Adam) 。本版は一七八四年の終りに出版された (J. Rae: Adam) 。八折版三卷「ニギニー」で發賣された (Ibid. p. 324) 。一七六七年道德情操論第三版を出した折にその標題に「前後に何も附け加へず單にアダム・スミスと呼ぶ」やう指定し (Ibid. p. 234) 七八年再版を出した際には税關監督官なる新官名を書添へることを特に避けた彼れであつたか (Ibid. p. 323) 本版では「前格拉斯ゴウ大學道德哲學教授、税關監督官、倫敦及びエデキンプ、ロ王立協會會員、法學博士アダム・スミス著」 by Adam Smith, L.L.D. and F. R. S. of London and Edinburgh: one of the Commissioners of his Majesty's Custom in Scotland; and formerly Professor of moral philosophy in the University of Glasgow. と書かれて居る。國富論訂正が可なり夙くから企てられたことは、H. ヴッケンシイが一七八一年に「カール・ミカエル氏と呼ばれる人に「才能、知識二つ乍らに於いてわが著述家の第一人と私が信ずるスミス博士は、目下彼の『道德情操論』及び『諸國民の富に關する論文』双方の改訂に従つて居る。兩書の新版(春に出版される筈である)では著しい變更と改良が行はれるだらう」と報じて居ることによつて推測される (W. R. Scott: Adam) 。彼は一七八二年十二月(七日)にカデルに宛て、次のやうに書いた。

「蘇蘭に歸つてから懶けて居ることに對して貴君に大ひに謝らなければならぬ。あり様は斯うです。私は倫敦で可成り多くの一部新刊書を、若しくは私には新しい諸版本を買入れた。そしてこれを讀み樂しむ面白さに、『國富論』新版準備といふ私本來の仕事が妨げられたのです。しかし今は熱心に私の本來の仕事にいそしんで居る。二三個月内に幾個所も訂正を加へ、又主として第二卷に三、四大きな増補を施した再版を御届けしたいと思ふ。その中に、短いがしかし私としては完全な心算である大英國のあらゆる貿易會社の歴史が含まれてゐる。」 (J. Rae: Adam Smith. p. 362)

これに對するカデルの返事は次のやうである。「七日附貴翰拜誦。内容を友人ストラアンに通じて置きました。同人は謝意を表して居ます。私は貴君が『國富論』新版を準備せらるゝ旨を聞いて仕合せに存じます。遅れると新版の發行がこの冬に間に合はないことを恐れます、しかし原稿を受取れば直ぐに出版に取掛りませう。倫敦に人が居なくなる前に出版が間に合はすことが出来なければ、次の冬の議會の會期まで延期するでせう。」 (W. R. Scott: Adam) 彼れは可なりの決心を以つて本書の改訂に従ひ、可なり相當の勞力をこれに費した。彼れはこれを以つて決定版とする考へであつたのであつた。職務上絶えず必然に起る中斷の許す限り、この數個月間ひどく勉強して居る。私は今私の第三版に加へやうと考へる有ゆる増補を完成するために、友人グレイ・クーパー卿が親切にも私に約束して呉れた大藏省からの若干の報告を待つて居る丈けです、本版は恐らく私の生涯の最後を見届けるものとなりませう。だから出来るだけそれを完全なものにして後に遺したい。……今準備中の大藏省報告を入手した後約一ヶ月のうちにそれを終り度いと思ふ。印刷は是非自分で校正したいから、校正刷は印刷された儘で送つて下さらねばならない。私は自分でそれを校正しないよりも、寧ろ來冬の初め倫敦に出で自分で印刷所へ出掛けたい位であります。」 (一七八三年五月二十二日。W. ストラアン宛スミス書簡 (W. R. Scott: Adam) の手紙で知られるやうに、一七八三年五月には本書改訂の業は殆んど完成に近づいて居たのであるが、猶ほ一年間出版されなかつた。八四年七月(十日)には校正刷の往復を報じ (Ibid. p. 290) 、また八月十日には前刷の贈呈を命じ、十一月十六日にこの委託の實施されたことを謝して居るのであるが (Ibid. p. 291) 、しかし一般への發賣は、出版者は議會が開かれて、倫敦に知識人の集まる時期を狙つたやうである。スウェチオーが同年十一月にベンサムに宛てた手紙に據れば、スミスは彼れに印刷の完成した新版を示して、カデルはあらゆる上流の人々が倫敦に集まるまでそれを出版しないで、その時に一時に大量を押し

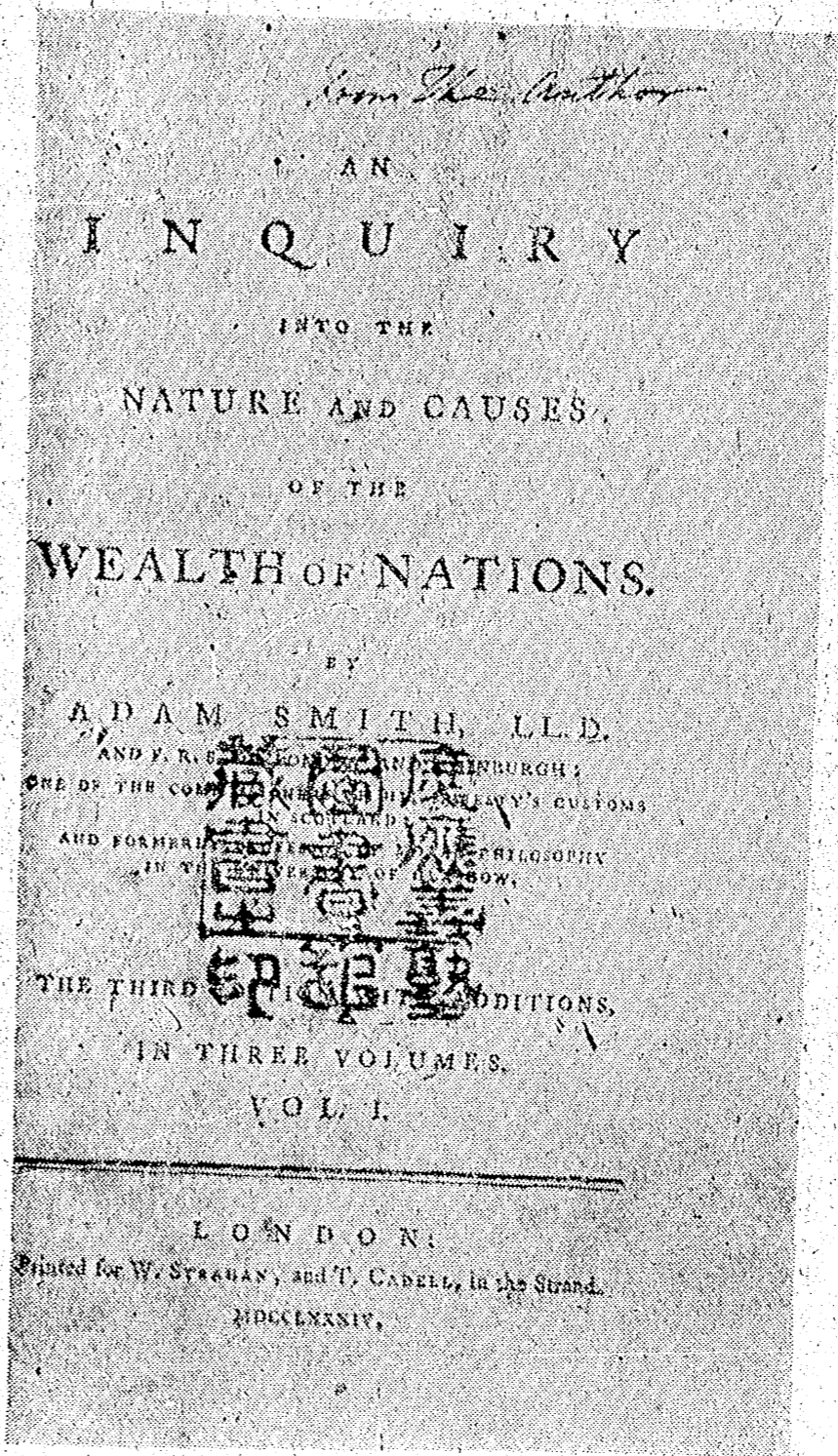
出すやう希望したと告げたといふことである (I. Rae: Adam)。
(Smith, p. 362)。

この結果第三版では著しい増訂が行はれた。彼が「一七七八年再版の出版と同時に任命された税關監督官としての経験が、戻税や奨励金に就いて新たな知識を得せしめたに相違なく、また東印度會社の植民地支配問題の重大化が彼れをして特許會社、制規會社の問題に深い關心を持たせたに相違なく (I. Rae: Adam)」。彼れはこの版に行つた増訂に就いて序文で次のやうに言つて居る。「私はこの第三版に數個所追加した。別して戻税に關する章や、奨励金の章に書き足し、又重商主義の結論と名づける一新章と、國家元首の經費に關する章に一新項を附け加へて置いた。でこれ等一切の追加箇所では現在の事態とは、一七八三年中及び當一七八四年初めの状態を常に意味するものである。」この最後の文句は、一七八四年春に至るも彼れが改訂の筆を絶たなかつたことを知らせて居る。猶ほこの外本版に至つて初めて索引が附された。しかしスミスのやうな性格をもつ人が自分で索引を作成するとは思はれない。事實彼れが自ら作らなかつたことは、第二卷三二〇頁にある誤植 *taille* が同じ場所に正しく *taille* ともしであるのに、索引 *montaban* の項に誤りの儘再出して居るのを見れば確かである。けれども同じく索引 *Banks* の項に本文にならぬ *Bank* の名を擧げて居ることは、この蔭の索引製作者が無智の賣文者流でなく、蘇蘭銀行史にある知識を具へて居たか、或はスミスが索引作成者の仕事を校正したかを示して居る (Wealth of Nations, Editor's introduction), p. xvi)。

彼は「一七八二年十二月のカデルへの書簡の先に引用した章句に續いて、「これ等の追加はそれ〴〵の場所で今度の新版に挿入するだけでなく、別に印刷して一志か二志半で舊版購入者に發賣した」。尤もこの定價は追加箇所全部書き上げた上、その大きさによつて決めねばならぬ」と書した (W. R. Scott: Adam)」。この申出に同意して出版され

たのが、「アダム・スミス博士著、諸國民の富の性質及び諸原因に關する研究第一及び第二版の訂正増補分」Additions and corrections of the first and second editions of Dr. Adam Smith's Inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. pp. 79. 4to. である。本冊は *Caption title* すなはち抜刷の體裁で、全く刊記がない。レエはそれは一七八三年第三版の上梓に先つて出版されたとして居るが、それは事實でない (I. Rae: Adam)」。何故なら一七八四年十一月十七日彼れがカデル宛て、「昨日スポッテイスイウツド氏が私に私の著書の索引のある部分を容れたストラアンからの小包を渡した。その外側の注意書に、舊版の購買者のために索引を四折版に印刷して他の増補分と一緒に渡すやうに望むかどうかを尋ねて來た。前二版の頁附は幾多の個所が一致しないから、これと調和させるためには索引の全部の數字を變更しなければならぬ。だから私は今ではもう遅いのでないかと思ふ。」と書いて居る手紙が発見されて居るのだから (E. Cannan: Two Letters of Adam Smith. In "Economic Journal" vol. VIII. 1898. p. 403.)。

慶應義塾圖書館に藏するところの第三版に就いては語るべきことが多い。この書はスミスの著者贈呈本である。彼れは「その出版書肆のよい華客であつた。」彼れが道徳情操論の出版に先つて友人その他に十八部の贈呈を出版書肆に命じたことは別の機會に述べた (本誌第三十四卷第カ號小稿)。國富論初版には贈呈先を記した同一のリストが発見されない。しかしその後彼れの友人も増加して居るのだから、更に多くの人々に著書を贈つて居ることは當然期待される。事實彼れ自身も「可なり多くの部數」を配布したことを言つて居るのである (I. Rae: Adam)」。書簡に據れば第二版が六部、第三版が十部數へられるといふことである。「From the Author」または「From the Author」と記してある書物の存在が、この兩者の爾餘の版本にも贈呈が行はれたことを示して居る。スコットは前者すなはち Author とあるものが自署である (I. Rae: Adam) であるものは獻辭が普通書記の手で書かれ、出版者から送ら



れたものであると言つて居る(W. R. Scott: A manuscript criticism of "the Wealth of nations." 1776 by). 慶應義塾圖書館に蔵するものの第一巻は「From the Author」とあるものの方である。表紙裏に「John Lord Sheffieldの蔵書票がある。すなはち本書は、彼れの一七八四年八月十日附カデル(?)宛書簡に、「私はストラファンに私の名で、出版前に數冊を、即ちルイザ、マクドナルド夫人、スタンホープ、マホン、ラフボロオ及びシエフキルドの諸卿に贈つて欲しいと書いた。これに第六部としてグレイ・クーパ卿を加へたい。ルイザ夫人へのは奇麗に小口金に装釘し、残りのものはボール紙表紙で」と書き送つて居るものに該當する(W. R. Scott: Adam?) シエフキルド卿 First Earl of Sheffield すなはち John Baker Holroyd (1735-78) は、ギボンとも親文があり、その遺言執行人となつた人である。一七六九年サセックスのシエフキルド・プレースのエステートを買った。すなはち John Lord Sheffield, Sheffield Place, Sussex の蔵書票がある所以である。彼れは當時に於ける商業及び農業問題の權威であつて、幾多の經濟上の小著がある。ギボンは「彼れの政治上の著作の感覺と精神は、わが國のアメリカとの通商上の大問題に關して輿論を決定した」と言つて居る(The autobiography of Edward Gibbon, ed. by John Murray, 1896, p. 334)。シエフキルド・プレースの彼れのエステートは農業上の模範とされた(National biography)。メシス文庫には同人の『合衆國の商業に關する諸觀察』Observations on the commerce of the United States, 1784. 及び『愛蘭の製造業、商業及び現狀に關する諸觀察』Observations on the manufactures, trade, and present state of Ireland, 2. ed. 1785 が收められ、後者には「著者より」の記載が記録されて兩者間の交遊の存在を證明して居る(J. Bonar: Catalogue of the library)。この自署名本はいつの時にジェームス・デヴッドソン James Davidson (1793-1864) の手に移り收藏されたものと思はれ、第二卷及び第三卷にその署名がある。デヴッドソンはデヴォンの好古家且つ書誌學者。Bibliotheca Devonensis; a

catalogue of the printed books relating to the country of Devon. 1852. その他の著述がある。現在は三巻共皮表紙に改装されて居る。恐らく彼れの手に據るものだらう。

一七八六年に出版された第四版は、第三版と同じ體裁で印刷され、頁附も全く同一である。彼れは本文には殆んど變更を加へなかつたが、序文でアムステルダム銀行に關する「最も明確にして囚れざる消息」(第四篇第三章第一部)に就いて和蘭の銀行家ヘンリー・ホープに負ふ旨を誌した。彼れは本版の印刷に先ち、例により自分で校正するために出版前全部の校正刷を送附すべきこと、及びそのために最も腕のある組工を用ふべきことをストラファンに申送つて居る(一七八六年二月十三日)。(註一)そして自らは、何等改變を加へなかつた」とは言つて居るけれども、それに伴ふ直接法の代りに、接續法を使用するとしつた小訂正は行つてゐるのである。(Wealth of Nations, ed. by E. Cannan, an. Editors introduction p. xiii. (註二))。

本書は第三版まではウキリアム・ストラファン及びT・カデルによつて出版されたが、一七八五年ウキリアムが死んだので末子アンドリュウが業を繼いだ。従つて本版からは彼れの代りに、A・ストラファンが標題紙に現はれてゐる。

(註一) W. R. Scott: Adam Smith, as student and professor. p. 296. LXIII. Adam Smith to [William Strahan] ヌットはこの手紙をウキリアム・ストラファンに宛てた書簡と推測してゐるけれども、それは誤りである。ウキリアムは一七八五年七月(九月)に死んでゐるのだから。

(註二) ロジャースは「一七八六年のこの版は極めて念入りに印刷されてゐる。私は三巻のうちただ一つ重要な誤植を見つけただけだつた」と書いてゐる。(Wealth of Nations, ed. by J. E. Thorold Rogers. 1880. Editor's preface. p. xxxvii)。

第五版は一七八五年に出版された。次の第六版が上梓されたのは彼の死後一七九一年であるから、これが著者生

前の最終版である。レエは一七八六年から九一年まで本書への新版の要求がなかつたと言ひ、一七八九年の佛蘭西革命に由る世論の本書に對する誤解への一傍證として居るけれども、それは間違ひである。(T. Rae: Adam). この最終版は第四版と殆んど同一である。唯々第四版の誤植と數個の間違つた或は間違ひと見做される文法上の呼應を訂正したが、その代りにまた随分と新たな誤植が入り込んだとキヤナンは指摘して居る(p. xviii)。

『富國論』はその後第十一版まで版數を數へて倫敦から出版されて居る。すなはち次の通りである。

- 第六版 一七九一年
- 第七版 一七九三年
- 第八版 一七九六年
- 第九版 一七九九年
- 第十版 一八〇二年
- 第十一版 一八〇五年

そのうち第六版から第十版までは、第三五版と同じ體裁で、すなはち八折版三巻として出された。唯々出版者として第八版以後は、A・ストラファンの外に、小T・カデル T. Cadell jun. 及びW・デヴィス William Davis(T・カデルはその子のために彼れを組合員に撰んだ)の名が現はれる。

第十一版も同じく八折版三巻に分けられたが、本版には「附、ウキリアム・プレフェア註、補章及びミス博士傳」"with notes, supplementary chapters and a life of Dr. Smith, by William Playfair."の副題が附加へられた。普通にプレフェア版と稱せられるものが之れである。彼は言ふ、原著第三及び第四版序文から、著者が、原理は不

變だが、その例證は最近の発見または経験の重要な結果を包括するやう最近のものまでに及ぼさなければならぬ、と考へて居ることが明かである。然るに原著はアメリカ革命以前に書かれたものである。またその後にも著者の研究に光明を興へる幾多の重要な事件が起つて居る。「かゝる事情の下に於いて、若しもスミス博士が猶ほ生きて居られたならば、博士は充分増訂の理由を見出し、變更を考慮せられたであらうと思はれる」と (Preface [by the editor], p. vii-viii)。編者の「補章及び註」はかゝる意味をもつのである。その言ふところは肯綮に當らずといふことはないが、この經濟學の父の遺した偉業「完成の仕事」を、その任でないことを自覺しての上であるとは言へ、引受けた編者の志は壯としなければなるまい。しかればこの大任を引受けた編者はどんな人であるかと言へば、初め製圖家であつた。その後機械商となり、失敗して佛蘭西に渡り、一七八九年バスティエ占領に参加して居るのでないかと言はれて居るが、再び倫敦に歸つて文筆により衣食したと稱せられる。彼れが國富論の編纂を敢へてした事情のうちには、その兄がエディンプロの數學及び地理學教授であつたスミスの親友ジョン・プレフェアであつたことなども考へられるだらう (National biography)。彼れは一七八七年夏スミスが倫敦に出た折に會つたといふ。スミスは彼れにジョン・ハンタアの診察を受けるために來たのだと言つたといふのである (Wealth of nations, ed. by A. Playfair, The life) of Adam Smith, 1805, vol. 1, p. xxxiv)。本版は標題紙からストラアンの名が消えた最初の倫敦版として注目される。それは「T・カデル及びストランドの W・ケヴィンス」・T. Cadell and W. Davies in the Strand」によつて出版された。一八一二年の「新版」・new edition」でもこの二人の名前を載せてゐるが、その後はカデルの名も消えてゐる。

五

英國で初めて著作権法が制定されたのは、一七〇九年である (Copyright Act, 8 Anne, c. 19)。この法律は「今

後述作される圖書の著作者、及びその譲受人は、その出版の日から十四年を期限として、その圖書を印刷し復刻する唯一の自由を有する。」をして「この十四年經過後は、これを印刷し處分する唯一の権利は、著作者が生存するならば、なほ十四年間、著作者、若しくはその代表者に歸屬する」旨を規定した。(The Encyclopedia Britannica, 11, ed. 1910, England, 2, ed. vol. 1)。國富論は一七七六年に公にされたのであるから、その保護は一八〇四年まで續いた筈である。だから一八〇五年その第十一版が正當な権利の繼承者 T・カデルとその共同者の手によつて出版されたのを最後とし、この頃から本書は様々な出版書肆から上梓せられることになつた。すなはち一八〇五年には倫敦グリーンランド及びノリス Greenland and Norris から二巻本として、十一年には J・メーナルド及び F・ツィンク J. Maynard and F. Zinke から八折版三巻本として、十二年 W・バインズ William Baynes から三巻本として、等々である。同じく一八〇五年、國富論は著者の郷國蘇蘭で上梓された。すなはちグラスゴウのユニバシティ・プレスから出た八折版三巻、及び R・チャップマンの袖珍版四巻がこれである。前者には著者の略傳と佛蘭西版ガルニエの解説の部分譯が掲載され、爾後の複製は多くこの形式に倣つた(註一)。また後者にはタッシー牌からとつたスミス首像の銅版畫が飾つてあり、これがスミスの肖像が英語版に現はれた最初である。(註二)しかしグラスゴウで上梓されたのは、この二種だけで、その後は蘇蘭の出版は、一八四八年のアバディン版を除いて、エディンプロに移つた。一八〇六年に出版されたその最初のもの、及び一八〇九年版(いづれも三巻本)には、一八一一年の倫敦版に同じ編者の序文が載つてゐる。こゝでは一八二六年以來 P・ブラウン P. Brown 及び T・W・ネルソン T. W. Nelson その他から一巻に纏めた廉價版が出版された。恐らくその大學の教科書用として賣り出されたのであらう。

(註一) 出版者は本版に初めてスミスの傳記を載せたことを、私かに得意に思ふ旨を述べてゐるが、プレフェアがその前年

にこれをしてゐることは前に述べた通りである。
 (註二) 本版は各巻別に頁附がしてある。

かうして國富論はこの國で一一七種(英蘭で七五種、蘇蘭で三八種、また愛蘭で四種、——この愛蘭の四種に就くはまた後に觸れるところがあるであらう)の版が起された(The Vanderplue memorial collection)。が、しかしそれが同じく英語國である亞米利加で上梓を見たであらうことは當然期待されることであらう。事實亞米利加では、著者の生前既に一七八九年、フィラデルフィアで新版三卷 An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations... A new ed. Philadelphia, Printed for T. Dobson, 1789. 3 vols が上梓された。(Cf. E. A. Seligman: N. Y. 1925.) 一七九六年に版を重ねた。また一八〇四年にはノートンから A new ed., with additions. In two volumes... Hartford, Printed for Oliver D. Cooke. Lincoln & Gleason, printers, 1804. 2 vols が、一二年には From the 11th London ed., with notes, supplementary chapters, and a life of Dr. Smith, by William Playfair. In two volumes... Hartford, Printed for Oliver D. Cooke, Peter B. Geason & Co., printers, 1811. 2 vols が上梓され、續して一九三七年までに二十一種の國富論が出版された。キヤナンはこれ等異版の多くが第四版に據つてゐることを言つてゐる(Wealth of nations, ed. by E. Cannan.)。恐らく第四版以後大なる訂正はなく、この版に於いて決定版と見られるに至つたからであらう。

しかし國富論が出版されたのは英語國だけでなかつた。それは一七八九年に夙くも瑞西で出版された。モーゼル版 An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations... Basil, Printed for J. Tournaisen, J. L. Le Grand, 1791. 4 vols がこれである。モーゼルは古くから大學もあり、第十六世紀以來の中歐の出版業の中心地

でもあつたから(Encyclopaedia Britannica, 11. ed. 1910.) この地に於ける國富論の上梓も全く考へられなかつた譯でない。スマイスの『道德情操論』及び『哲學問題の諸論文』も一七九三年、一八〇〇年、及び一七九九年にこの地で刊行されてゐる。

これ等數多い異版のうちで特色あるものを挙げれば、まづ一八一四年に出版されたデヅキッド・ブカナン編エディンブルグ版『國富論』三卷 In three volumes. With notes and an additional volume, by David Buchanan... Edinburgh, Printed for Oliphant, Waugh & Innes; London, J. Murray, 1814. 4 volumes. に指を屈しなければならぬ。ブカナンは本版に第四卷として、彼れ自身の『スマイス博士の國富論に取扱はるる諸題目に關する觀察』 Observations on the subjects treated of in Dr. Smith's Inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. を附け加へた。かれは本卷を加へる理由をつぎのやうに言つてゐる。スマイス博士は理性を驅使するあんなにも高い素質に恵まれながら、完璧な著述を公にされなかつた。研究の對象と限界とを諸國民の富にとられたのは、主題の範圍を狭く取られたものである。博士の取扱はれる學問は、立法の高い部門に屬するから、當然富とまつたく關係のない幾多の興味ある問題を包含しなければならぬ。人間社會は政策と正義の一大機構である。そして賣買は、あらゆる形態の社會で人間の所業の大部分を占めるものであるから、商業の本質を説明することは、これを不利、不正な拘束から擁護すると同様、極めて大切な事柄である。政治經濟學は、だから、その研究の一部として商業の考察を擁する。して善政の効果もまた商業を保護し、人民に富を得せしむるに在る。けれども富は政治の直接の目的でもなければ、また政治經濟學の直接目的でもない。政治經濟學は正義と政策の原理に基礎を置くところの思索であり、政治はその實際の結果である。...この見解によれば、この學問は、富に關係がないといふのでスマイス博士が

考察を避けた興味ある問題を多数含まなければならぬ。例へば、國家を保護する最善の方法を研究するに當つて、博士は政治の問題を經濟の問題に變へ、最善の保護制度ではなく、最廉の保護制度を考究せられた。「本書の目的は、スミス博士に膠れるものを匡し、省かれたものを補ひ、その理論を現代に應用し、かくて政治經濟學の完全な體系を展ぶるにある。世界のその後の變遷を考へれば、いまやスミス博士の著作は、増補を必要とすることが明かである」(Observations: Introduction, pp. vii-xvi.)

彼れはこの「觀察」ある故に經濟學史上に地位を占めるのである。彼れはスミスが價格の構成を論ずるに當つて、地主もまたほかの人々と同じく、彼れ等がかつて時かなかつた場所で刈ることを好み、その天産物にさへ地代を要求すると言つた章句に着目し、「ほんとはさうだ。けれども問題は、なぜこの明かに不合理な要求が一般に認容せられるかだ。地主以外の人々もかつて時かなかつた場所で刈ることを好むのだが、かういふ羨ましい目的を達し得るのは地主だけらしい」と註記した(vol. i. p. 80 note)。地代は土地獨占の結果だと考へたのである。「獨占の利潤は地代とまつたと同じ基礎に立つものである。獨占は、地代の場合に自然が行つたものを人為的に行ふものである。それは市場の供給を、價格が賃銀及び利潤の水準以上に騰貴するまで制限する」(vol. i. p. 99 note)。その場合食物の供給は、「耕作を加へ得る土地の性質に制限される」といふ收穫遞減の思想が基礎になつてゐることは言ふまでもな(274 note)。彼れは地代が唯一の課税源泉だと考へる重農論はまつたく膠つてゐる。それはほかの人々の懐から取り去つたものに過ぎない。それは「これを受取る人々に得だけれども、同じ割合で支拂ふ人々に損失を與へる土地産物の價格騰貴」から生れる、と斷定した(vol. iii, p. 272)。これは地代は社會繁榮の徴だとする舊來の見解、及び地主の利害は社會のそれと一致するといふアダム・スミスの地主禮賛に一大修正を加ふるものである(Edwin Cannan, A history of the theories of production and distribution in English

political economy from 1776 to 1848. 3. ed. London, 1922. pp. 221-22).
E. Cannan, a Review of economic theory. London, 1930. pp. 230-31.

彼れはまた地代の意味をあらゆる貨物におし擴めた。彼れは言ふ、賃銀及び利潤を支拂つた後に、地主に餘剰すなはち地代を残す高價は、違つた原理で説明しなければならぬ。それは地代を産む物品が、一般に生産せられることが比較的鮮い事實から生れるのであるらしい、消費せられる貨物の數量が、生産せられる數量を束の間も凌駕し得ないことは明かである、そして消費を供給の限度内に制限するものは、價格の騰貴である、地代はこの價格騰貴が生ずる「賃銀及び利潤を凌ぐ餘剰」であるから、「この餘剰を産むものは、何でも地代を支拂ふと言つていい、勞力を省く機械の發明者は、その秘密を保つならば、彼れの製品を、地代すなはち賃銀及び利潤を超える餘剰を産むやうな價格で賣ることができらう。ただ違ふのは、製造業に於ける改良は製造品の價格を低格させて社會の利益となるに反して、農業上の改良は、價格を低落せしめず、ただ地代を増加して地主を益するだけである。蓋し土地生産物は増加が不可能だから」といふのである(Observations, p. 34-40)。本版は一八一七年に第二版 2d ed. In four volumes. Edinburgh, Printed for Oliphant, Waugh & Innes; London, Ogles, Duncan & Cochran, 1717. が重版された。(註)

(註) 彼れは Inquiry into the taxation and commercial policy of Great Britain, with Observations on the principles of currency and of exchangeable value, 1844. の著者といはれり。それは一八一四年の「觀察」に多々附し加へらるる。Dictionary of national biography, 1908, vol. iii, p. 185.

一八二八年にマカラックの紀念すべし『國富論』With a life of the authour, an introductory discourse, notes, and supplemental dissertations. By J. R. McCulloch, Esq. Edinburgh, A Black, and W. Tait, and Longman,

Rees, Arne, Brown, and Green, London. 1828. が上梓された。マカラックはリカードオの労働價值説の熱烈な支持者であつて、今日二十五磅の値ある立木は百年前に一志の費用で植えられたものかも知れないが、その價值はまづたく労働に由るものであるなど主張して(J. R. McCulloch, The principles of political economy. 1825. p. 317; Cf. 1922.) 却つて後者から「貴君は諸貨物の價值を測るのに、その生産に要する労働量をもつてすることが少しく私に過ぎてゐる」とたしなめられたひとであらう。(J. H. Hollander (Ed.), Letters of David Ricardo) 彼は少年時代母に伴はれてスミスが晩年を送つたエデキンプロに移り住んだ頃、そこではなほ當時この偉大な經濟學者の日常が語り繼がれてゐたといふ。(John Rae: Life of Adam Smith. 1895. p. 327. 『學燈』第四二頁) 彼は本版にダッガアド・ステュアートのスミス追憶の要約に、多少の私見と新事實を加へた略傳と、(註一)彼れが一八二四年に公にした『經濟學の發生、進歩、特殊目的及び重要性に關する一論』(A discourse on the rise, progress, peculiar objects and importance, of political economy; containing an outline of a course of lectures on the principles and doctrines of that science. から取つた「序論」を附した。(註二)彼れはそのなかで「國富論は、ロックスの『試論』が哲學でしたことを、經濟學で成し遂げたものである」と言つてゐる(Cp. lxviii).) また第四卷には、その殆んど全部を占めて『國富論』公刊後發見された主要原理、及び獨立戦争後施行されて經濟法を説明する三十項の「補註及び補論」を添加した。

(註一) 本略傳は一八五三年に Treatises and essay on subjects connected with economical policy; with biographical sketches of Quesnay, Adam Smith, and Ricardo. By J. R. McCulloch. Edinburgh, 1853. に再録され、また一八五九年に『恐らく私家版として』(The Accounts of lives and writings Quesnay, Adam Smith, and Ricardo, by J. R. McCulloch に収録された。

(註二) 『一論』は、一八二三年エデキンプロで試みた私講座、及び一八二四年倫敦で行つた「リカードオ經濟學講座」の序論として講述せんとして果さなかつたところを聽講者の便宜のため印刷したものである。それを本版で國富論公刊までの經濟學の發生、進歩、國富論の功罪、及びその後の發達の概要を示すものとして、更に再録したのである(Editor's preface, p. x). 私はこので一八二三年のエデキンプロの私講座と言つて居るけれども、これは二年から初められてゐるのかも知れない。それは一八二三年五月二十一日附の彼れの手紙に、「昨日私の講義を了へたとあるに據つたのであるが、更に別に彼れに經濟學の講義を試みる計畫があり、リカードオにその二序講の閱讀を乞ふ旨を述べる一八二二年一月十三日附の手紙が残つて居る。この講義に就いては、彼れは「六十人學生があつた。それは實際に刺戟になつたと思ひます。學生はたしかにかなり喜んで呉れました」と報告してゐる。(Letters of John Ramsay McCulloch to David Ricardo 1818-1823. Baltimore, 1931. pp. 32, 42).)

「リカードオ記念講座」は、この偉大なる經濟學者を紀念して、歿後友人間に企てられたものである。マカラックはグロートの推薦によりその適任者として講師に選ばれたのである(本誌第三十三卷第一號小稿「J. R. マカラック編『經濟學文獻』(四三頁参照)。

本版は一八三九年に二卷本として上梓され(この十年間には重版されなかつた。また價二ギニーを超えた原版四卷本の半價以下で賣られることをマカラック自身が言つてゐる)、その後三十年間數年毎に復刻された。一八二九年の原版にはクッシイ牌が載せられただけだったが、本版以下には縁の反つた帽子を被り、鐵砲のやうに肩で當てエデキンプロの街を歩いたと町のひとが傳へてゐるステッキを手にするジョン・ケイ John Kay の全身像が納められてゐる。本版は一九〇四年キヤナン編『國富論』が出るまで最も汎く行はれた。それは英吉利だけでなく、亞米利加でも(H. B. Vanderhug, Adam Smith and) またわが國でも(福田徳三著『經濟學講義』、『經濟學全集』第一卷二七七頁) そうであつた。

一八三五—三九九年にはウェイクフィールド註の『國富論』With a commentary, by the author of "England and America." が出た。E. C. ウェイクフィールド Edward Gibbon Wakefield は移植民の研究家で一八三三年に『英國と亜米利加』England and America を著し、政界の上層部に認められた。本書の「植民技術」の一章は發展されて一八〇九年の「植民技術に就いての見解」A view of the art of colonization となつたのである。ウェイクフィールドは『國富論』を、もしも本書が理論だけから出來上つてゐたら、一般讀者は見向きもしなかつたらう、いや分りもしなかつたらう。ところが彼れは物語りでも讀むやうに、堪能して讀むことができるのである。『國富論』には、今日のペニー・マガジンのやうに、繪が満載されてゐる。…アダム・スミスは經濟學の物語作家だ」と評してゐる。がしかしまた一方では、「アダム・スミスが採つた歴史的方法は、その著書に或る混亂を生じた。」例へば第一篇で、生産論を完結しないうちに、否第二篇の標題である資本の性質、蓄積及び投用に觸れないうちに、賃銀、利潤及び地代の富の分配を取扱ひ、また労働及び資本の生産性によつて大いに動かされ、また生産物の分配によつても恐らく少からず影響される交換價値が資本の前、賃銀、利潤及び地代の前に來てゐるが如き、これである、とも批評してゐる(Preface to this third edition)。彼れは協業に注目した最初のひとである。J. S. ミルはその原論で、「ウェイクフィールド氏は、この問題(協業)の一部が全體と誤られて損害を招き、分業の原理の下により、一層根本的な原理が横つてゐて、これを包括することを指摘した最初のひとだと信ずる」と言つてゐる(F. S. Mill: Principles of political economy, ed. by W. J. Ashley, p. 116)。彼れは分業の章への補註で「協業に明かに二種類あると思ふ。第一は、數人が同じ用途で互ひに助け合ふ場合に行はれるやうな協業であつて、第二は、數人が異つた用途で互ひに助け合ふ場合に行はれるやうな協業である。それ等は單純協業及び複雑協業と言つてゐる」と言つてゐる(Vol. 1, 26; E. Cannan, History of the theory and distribution, p. 50)。

J. E. T. ロジャースは「スミスの書の主な二英語版はギボン・ウェイクフィールド氏とマカラック氏のそれである。そのうち前者は不完全だ、ウェイクフィールドはだんだん仕事に飽きて出版者を失望させたらしい。ウェイクフィールド氏の書くところが、鋭くて價値あるものであることは言ふまでもない」と言つてゐる(Wealth of nations, Rogers, 1880, Editor's)。その一八三五—三九九年の初版には In six volumes. London. C. Knight, 1835-39 である。六巻本より成るやうに書いてある。けれども實際には四巻しか刊行されなかつた。しかも『英國と亜米利加』の著者の註釋はなく、出版者はその違約と續篇の發行の遅延を辯明してゐる。一八三五—四〇年刊の本版の第二版に相當するものは、初めから四巻本 In four volumes とし、そして第一巻と第二巻にウェイクフィールドの註釋がある。しかし第三、第四巻には依然としてこれを缺いてゐる。(註)前記ロジャースの言葉と思ひ合せて戴きたい。この註釋は一八四三年版に至つて全部現はれた。この註釋はブカナン版、マカラック版とは異り、各章末に附してある。そしてこれを附した理由に就いては、「私の最後の目的は、アダム・スミスその他の學說をわが國經濟の若干新事態に應用するにある」と言ひ、「この新事態はあらゆる階級の人々の恒久的議論の對象となり、大多數人の危険極はまる焦躁の原因となつてゐるものである。私はこれによつて過去二十年間聞かされつゞけてゐる、かの産業各部門に於ける資本家及び労働者間のかの不幸を指す。純粹政治家らが最近この國に行はれた急速な民主思想の進歩に驚異の眼を放つてゐる間に、經濟學者等は、賃銀の低落と利潤の下落が必然に生ずる一般の不滿に言及するによつてこれを説明することが出来る。政治的變化への欲求は經濟上の苦痛からする不可避の結果である。人々は、經濟上の苦痛は政治の膠りの生ずるところであるといふ信念に驅られて、實質的民主的政治の建設に精進しつゝあるものである。これは大きな、恐るべき試練である」といふ見解を披瀝してゐる(Preface to this third)。ウェイクフィールド

ル下の名は一八四三年版に至つて初めて表はれ、その表題紙には With notes from Ricardo, M'Culloch, Chalmers, and other eminent political economists. Edited by Edward Gibbon Wakefield, Esq. とある。そして各巻毎に巻頭にスミス、リカード、ケネー及びハスキンスンの肖像が掲げてある。

(註) 本版は何となく編者の熱意の不足を感じさせるものがある。慶應義塾圖書館に蔵する一八三五四年版は、第二巻が一八三五年、第三巻が三六年、第二巻が三九年で、そして第一巻が一八四〇年の出版である。

次に注意すべきは、一八六九年の J. E. T. ロチャース James E. Thorold Rogers のオックスフォード版、及び一八八四年の I. S. ニュールスン版であらう。ともに巻頭に編者の解説を載せてある。殊に「スネル奨學資金」の給與を受けてペリオル・カレッヂに學んだスミスのオックスフォード在學時代に就いての新資料を加へるロチャースのそれは看過し難いものである (Editor's preface, p. viii. Cf. Vanderhulst)。彼れはまた原文に註することの少なかつたスミスの原典を訪ねるに努力した。この點に於いて彼れは後のキャナンに先鞭をつけるものである (Editor's preface, p. xxxviii)。 (註) またニコルソン Joseph Shield Nicholson は『國富論』が「多く話されて讀まるゝこと尠なき書の一」であることを言つてゐる (Introductory essay, p. 13)。この外流布の多いものに第六版に據つた『ボーン標準文庫』Bohn's standard library 版(一八八七年)、ルードリッヂ發行の『ジョン・ラボック卿百撰書』Sis John Lubbock's hundred books 版(一八九二年)及び『萬人文庫』Everyman's library (一九一〇年)版等の大衆版がある。最後のものには E. A. R. セリグマンの序文があり、スミスの理論は多くは先人に藉るものである。例へば「地金論者への反對論はマシに、價值尺度としての勞働概念はベディに、私益理論はマンドヅキル、ヒューム及びクツカアに、利率低下の利益に關する説はチャイルド及びマッシーに、自然法論はロック及びハチスンに、通貨に關する見解はニュートンに、信用論はダエヴェナントに見出し得るものである。…有名な租税の四原則でさへもが、實際彼れの佛蘭西の先人達の一部に殆んど一語一語見出されるところである。」しかし彼れは前人達の奴隸的追隨者でなかつた。「佛蘭西に於いてフキジョクラット、英吉利ではアダム・スミスが産業革命前夜の新秩序の分析を試みた最初の人達であつた」と書してゐる (Introduction, p. xiii. xiiii)。

(註) 第二版(一八八四年)では、當時彼れが準備しつゝあつた『英國農業及び物價史』History of agriculture and prices in England 1866-1882 その他より引用して『國富論』第一編の小麥價格表を増訂してゐる。

かうして終に一九〇四年にエドウィン・キャナンの『國富論』がでた。本版に就いては今の讀者に多く語るを要しないだらう。彼れは生前最後の版である第五版をもととし、初版との異同を對照して訂正の沿革を註とした外、引用に對しては『アダム・スミス文庫目録』A catalogue of the library of Adam Smith, 1894. その他により原典を捜索し、また巻頭に價値の高い長文の解題を附した (Preface, vol. 1, p. 7)。かうしつた國富論の「完全な歴史的版」の編纂は、かつてフォックスウェルによつて積へられ、それが後に倫敦大學に納つてゴールドスミス文庫となつた彼れの有名な文獻蒐集の最初の目的であつたと傳へられるが (Herbert Somerton Foxwell, June 17, 1847-August 3, 1936. In "Economic Journal", vol. 46, 1936, p. 588)。それは彼れによつて遂げられず、キャナンに至つて成就されたのである。本版は一九二〇年に第二版、二三年に第三版、二五年に第四版を重ねた。そして一九三七年にはマックス・ラッナー Max Lerner の緒言を加へて『現代文庫』Modern library に收められ、四〇年に丸善(東京)がその權利を得て重刷した。これが國富論復刻の最新なるものである。少くもアダム・スミス歿後百五十年を紀念された昭和十五年までに出版された最後のものである。

六

『國富論』のこの夥しい英語版の普及は、本書がこれ等の諸國で果した思想界の指導的役割を表徴するものに外なら

ない。がしかし著者の許諾を得ない夙い不正版の登場は、さらにこれに「證を加へるものであらう。本書はその初版が公にされた一七七六年に、既にこれと同じ出版年紀(すなはち一七七六年)をもつ不正版が、利に敏い出版書肆によつてダブリンから出版された。すなはち An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations... In three volumes... Dublin. Printed for Messers. Whistone, Chamberlaine, W. Watson, Potts, S. Watson, Hoey, Williams, W. Colles, Wilson, Armitage, Walker, Moncrieffe, Jenkin, Gilbert, Cross, Mills, Hallhead, Faulkner, Hillary, and J. Colles, 1776. これである。本版は、上に見るやうに、出版者としてホワイトストーン、チェムバリン等二十名の名を連れ、真正の倫敦版とは異り、八折版三巻から成つてゐる。この版の存在に氣附かれたのは、恐らく小泉信三博士が最初であらう(三山學會雜誌、第五卷、第三號、アダムスミス紀念號、小泉信三、アダム・スミス上巻「諸國民の富」の序)。この版は一部出版者を變へて一七八五年に「増訂第四版」を、一七九三年に「増訂第五版」を、そして一八〇一年に「増訂第六版」——すづれも二巻本——を出した。この「増訂」・with additionsの文字は倫敦正版では、第三版以來ないものである。キャナンはこれを「偽」版と言つてゐる(W. Wealth of Nations, ed. by E. Cannan 1904, vol. I, p. xviii)。また第四版には第三版序文の「しかし私はこの第三版には數ヶ所追加した」とある文中の「第三」に「第四」を置き換へ、第五版には「第五」を置き換へた第三版の序文を掲げ、そして第六版には同じく「この第五版に」とある第五版の序文をその儘載せてゐる。しかもその第四版の出版は倫敦正版のそれよりも一年夙い。(註)私はこゝにこのダブリン版の出版者の悪意と不眞面目さが覗はれると思ふ。また著者の許諾を得ないもの、若しくは英國に於ける著作權法の拘束を故意に避けたものとして、一七九一年及び一八〇一年の前記バーゼル版二種及び一七八九年乃至一八〇四年の亞米利加版三種は、尠くも道義的意味に於いてまさに不正版たるものであらうと考へる。

(註) 第六版は序文だけでなく、本文も、頁附けもまづたく第五版と同じ。ただし出版者は第一巻と第二巻とで異なり、第一巻のそれは第五版のものと同じ。

けれどもこゝに最も奇怪なのは、一八〇九年「新英語發音辭典及び自然神學要論その他の著者」と稱するウキリア・ヘンネールド William Enfield, M. A. Author of the New pronouncing dictionary of English language, Elements of natural theology, &c. なるものが、「著名な専門家紳士の援助により」著はしたと云ふ『國富論』 An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations; containing the elements of commerce and political economy. London: Printed for Thomas Tegg, no. 111, opposite Bow Church, Cheap-side, 1809. である。内容はつぎの目次が示すやうに、正しくスミスのものであり、文章はスミスの國富論の言葉を意譯したに過ぎない。蓋し偽版の最たるものであらう。

- 第一章 分業その他
- 第二章 貨幣の起源及び使用に就いて
- 第三章 財貨の價格の構成部分に就いて
- 第四章 財貨の自然價格及び市場價格に就いて
- 第五章 労働の賃銀、資本の利潤その他に就いて
- 第六章 土地の地代に就いて
- 第七章 資本の區分その他に就いて
- 第八章 社會の資本の一特殊部門と見做される貨幣に就いて

第九章 資本の蓄積に就いて

第十章 利附貸附資本に就いて

第十一章 資本の各種用途に就いて

第十二章 諸國民に於ける富裕の進歩の差異に就いて
富の自然的進歩に就いて
.....

第十三章 政治經濟に就いて
商業主義に就いて
輸出に就いて
入に就いて
植民地に就いて
農業主義に就いて

第十四章 主權者または國家の收入に就いて
.....

第十五章 社會の公的収入の源に就いて
.....

第十六章 公債に就いて

この著者はどんな意圖の下にかういふものを公にしたのか分らないが、もしも初學者のために解説を書くつもりであつたならば、もつと正しい方法があつた筈である。この大著に對して何等かの形で解説が欲しい、例へば本書の初めか終りに「短い獨立の文言で表はされた全體の要旨」を附せられたい、といつた要求は、初版出版の初めから著者から本書の贈呈を受けたヒュー・ブレミア Hugh Blairが既に述べてゐるところである(A manuscript criticism of "the Wealth of Nations," by W. R. Scott. In "Economic," かつる書は實際夙くから行はれた。シキアン・シキアス Jeremiah Joyce History," Feb., 1938, p. 52) (註)がスミスの死後數年を経なす一七九七年に、既に政治學の研究者及び「國富論をその講義の本質的部門とする自由教育主義の學校の教科書」用を目的として公にした「アダム・スミス博士著國富論の完全なる分析もしくは要略」 A complete analysis or abridgement of Dr. Adam Smith's Inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. すなはちこれであつて、本書は一八〇四年及び一八一八年に劍橋及び倫敦に於いてそれぞれ再版を、一八二一年には倫敦版第三版を重ね、その需要の多かつたことを示してゐる (The Vanderblue memorial collection ofのみならずこの版は遙かに後れて一八七七年に W. P. orton Wolsley P. Emerton により改訂版が上梓され、後者はまた更に一八八一年に自己の名で要略版 An abridgement of Adam Smith's Inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. Oxford. を出した。またヴァンマンリーはスミスの死の直後一七九二年に匿名の著者による Suppression of the French nobility vindicated... to which is added a comparative view of Dr. Smith's Wealth of nations with regard to French and England, by the "Rev. T. A." London, 1792. なるもの存在を傳くしる(Adam Smith and the "Wealth" of nations. 1936. p. 14) 如何なる内容なるものか筆者は知らなす。なほこのほか同じ種類のものとして「學生版國富論」 Student's edition of the Wealth of nations, Book I and II,

abridged, with selected portions of Books IV and V, with notes and selected examination questions by A. W. Roberts. Oxford, 1889. 及びマンリー編「經濟學古典」叢書中の「Select chapters and passages from the Wealth of nations of Adam Smith, 1776. New York and London, 1895.」の事は何人も知るところである。

(註) シェルミア・ジョーンス(一七六三—一八一六年)は後にユニテリアン協會の幹部となつた人であるが、セントルマン・ヤズキンには、彼れ自身の名をもつ多数初步的著作の著者、他の匿名もしくは他の人の名の下で公にされる書物の編者として紹介されてゐる(Dictionary of national biography, vol. X, p. 1105-1107; Gentleman's magazine, 1816, Pt. 1, p. 634.)。彼れには猶ほこのほか「Analysis of Paley's Elements of natural theology」1804 年がある。

私は以上に於いて國富論の生成から、その正版、異版、偽版、抜萃版を概観した。續いてその翻譯を一瞥すべきであるが、それは別の機會に譲りたいと思ふ。

追記

本稿を書き了へた後『マンズリー・レビュー』Monthly review の一七七六年四月號 for April 以降の『國富論』の書評 An enquiry into the nature and causes of the wealth of nations. By Adam Smith LL. D. and F. R. S. formerly professor of moral philosophy in the University of Glasgow. 2 vols. 4to. Il. 16s. Cadell. 1776. が連載されてゐることを知つた。次の通りである。

「財政家もしくは實業家が公富、私富の獲得運用術の實際に、どんな困難を見出すにしても、それに劣らず哲學者はその本質、起源の研究に、また眞の富と架空の富をその眞因に遡つて求むるに、紛糾する困難に遭遇するものである。商業の原理、貨幣の作用、労働もしくは食糧の價格騰落の根據、公私基金の効果、及び同じ性質の他の問題は、論ぜられたことも多いけれども、猶ほ議論の對象として残り、完全な理解に達しないものやうである。これ等の問題の筆者のあるものは實業家であつた。そしてこの人達の地位職業は、成程彼等に正確な事實の知識を與へ、彼等をして公衆に貴い知識を普及することを得せしめたけれども、その教育と生活様式は、彼等にこの種の知識を一の正しい體系に組織するために必要な、かの總體的觀察をなし、哲學的思索を行はしめるに特に適した譯でない。他の者は、特定の事實を蒐集し検討する勞を省いて、一般的な觀念と原理にのみ基づいて理論を立てた。しかしこれはどんな思ひつきな理論であるにしても屢々經驗と相反することが知られた。かやうにして事實の正觀と、原理の正しい科學的研究とを併せ兼ねた學者は極めて乏しい。

「この後の部類の最も勝れたものうちに、本書の尊敬すべき著者を列するに、公衆は同意するに吝かでないと言々は信するのである。彼れは諸國民の富に關係ある幾多の問題に、廣汎な一貫した見解をとり、事實と理論の適切な結合から、かつて公衆に示されたいづれの體系よりも、大體に於いてより満足な、またより勝れた根據に立つと、吾々が解する體系を引き出した。

「本書の文體と構成は、取扱ふ問題に適當であり、また少數の場合を除き充分正しいけれども、それは決してその主な勝れた點ではない。その功蹟はもつと高いところであり、主として著者の複雑錯綜する問題に就いての研究の深さと正確さに、彼れの樹てた原理の眞實性に、また彼れが讀者に引出すことを得せしめた結論の重要と效用に由來するのである。」(The monthly review, or literary journal, from January to June, inclusive M. DCC. LXXVI. p. 299-301.)

『國富論』公刊直後に於いて、經濟學の成立へのスミス以前の時事論者の役割と、これに對して體系を興へたスミスのこの學問への貢獻をかやうに明確に説く筆者の批評は、寔に聽くべきものがある。何びどの筆に成るものか明かでないが、以下數號一六、七、八月號 for June, July, August—に亘つて紹介される『國富論』の概要とは、筆者のこの學問に對する理解の深さを想はせるものがある。或はまた本文に述べたやうな「短い獨立の文言で表はされた全體の要旨」への欲求(ヒューブレニア)に應ずるものと見ていいかも知れない。

古版經濟書解題

一千八百十一年版デイ・ボアロー著『經濟學學習の手引』

高橋誠一郎

デイ・ボアロー(D. Boileau)と名乗る人の『經濟學學習の手引』(An Introduction to the Study of Political Economy: or, elementary view of the manner in which the Wealth of Nations is produced, increased, distributed, and consumed.)が倫敦で出版せられたのは一千八百十一年のことであつた。出版者は父の代からサー・ジェームズ・スチュアートの『經濟原理』や、アダム・スミスの『國富論』など經濟學界の名著を發賣してゐるストランドのティール・カデル(T. Cadell)と、ダブルユー・デーヴィス(W. Davies)である。

著者ボアローが如何なる生涯を送つた人であるか、私には今の處、全く之れを知るの便がない。手近かの人名辭書や經濟學辭典には全然彼れの名を看出し得ない。唯だ僅かに一千八百十一年七月一日に草せられた著者の序文に據つて、彼れが歸化人であること、彼れが既に一千八百〇七年倫敦のコールバイン(H. Colburn)書店から統計學に關する著作 Essay on the Study of Statistics. を出版して居ること、彼れが本書出版の頃にはブロンプトン街に